



JIC インフォメーション

第202号 2019年7月10日

年4回 1・4・7・10月の10日発行

1部500円

発行所: JIC 国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<http://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPCビル 7F TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0032 大阪市中央区谷町 2-7-4 谷町スリースリースビル 7階 TEL: 06-6944-2341

はりねずみのジェーニャ



ロシア・旧ソ連 国際交流誌


<http://www.jic-web.co.jp>

左上、モスクワの交通環境改善の取組み（鳩山紀一郎氏の講演録）

左下、ルースキー島の先端（食とインスタ映えのウラジオ紀行）

右上、日ロ交流年閉会式に安倍首相、プーチン大統領が参加（大阪いずみホール）

右下、関西空港旅行博に出展（ロシアグッズが好評だった JIC 旅行センターのブース）

- ＜旅行記＞ 食とインスタ映えのウラジオ紀行
……………稲塚 俊介（JIC 東京）……………2P
- ＜留学記＞ 遠い隣国での挑戦 ……JIC 露語講座受講生……………4P
- ＜JIC 報告＞ 関西旅行博に出展……………小原 浩子……………6P
- ＜ロシア情報＞ 日ロ交流年 閉幕式 大阪で開催
来年は「日ロ地域交流年」に！……………7P
- ロシア文化フェスティバル、今年のプログラム……………7P

- ＜日ロ合同エッセイ集＞ 「2 時間で逢えるウラジオ-日本」
……………樫本 真奈美（同志社大学講師）……………8P
- カウナスの杉原千畝記念館、シモナス館長の来日……………10P
- ＜講演録＞ モスクワ交通環境改善の取組み
鳩山紀一郎（長岡技術科学大学・特任准教授）……………12P
- ＜講演録＞ 松井須磨子とロシア
……………相沢 直樹（山形大学教授）……………17P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年4回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

食とインスタ映えのウラジオ紀行

～週末に楽しむお洒落なヨーロッパ～

稲塚 俊介 (JIC 東京)

東京から片道 2 時間半のフライトで行くことができ、綺麗なヨーロッパの街並みと美味しい食事を楽しめる場所があると言ったら、みなさんはどう思いますか？ みなさん、スマホのグーグル地図を開いてください。そしてスタート地点を山口県に設定したらひたすら上にスクロールしてみてください。見えてきたでしょうか。日本海を北上したところにあるのは、そう！ウラジオストク！！

「(～)」??? 初めてこの名前を聞いた人は今こんな顔をしていないでしょうか。私の友人達はほとんどこんな顔をするので慣れてしまいましたが。そしてそれがロシアの都市だということを付け加えるとさらなる驚き。真っ先に、「気温は年中マイナスでしょ?」、「映画でよく見るロシアンマフィアが普通に町中にいそう」、「ボルシチって美味しいの?」など皆それぞれの印象を述べますが、その多くが偽りの負のイメージなのです。よくインターネット上では冗談半分に“おそロシア”と、何かとロシアで事件が起きる度に揶揄されますが(個人的には結構好きです)、それがあたかもロシアンスタンダードだと思い込んでロシアが敬遠されてしまうのは非常に残念です。

しかし、冒頭で述べたような魅力を詳しく話していくと、誰もが徐々に本当のロシアの良さに惹かれていきます。今回はそんな“良い意味でのギャップだらけ”のウラジオストクについて紹介したいと思います。

1. そうだ、週末はウラジオ行こう！

ウラジオストクまでは成田からロシア航空 (SU) かシベリア航空 (S7) を利用して行くことができます。フライト時間は約 2 時間半！近いですね～。東京駅から京都駅まで新幹線で行くのと同じくらいです。テレビ CM で“そうだ、○○行こう”と宣伝するくらいなら、“そうだ、週末はウラジオ行こう！”ってなってもよいと思うのです。そのくらい地理的に近いということです。これだけでもロシアに対して親近感が湧きませんか？ ウラジオストクは日本に一番近いヨーロッパなのです。

そこで早速 5 月下旬に、「インスタ映え観光スポット」を探して、ウラジオストクに行ってきました。今回は 3 連休の週末を使った旅行を想定していくつかお勧めスポットを書いてみます。では、早速、見ていきましょう！

2. ウラジオストクでグルジア料理！？

そもそもグルジア料理ってなに？というところから始めないといけませんね。グルジアは今や日本ではジョージアと呼ばれていますが、ロシア語ではグルジアを用いているので、

ここではグルジアと表記します。グルジアは黒海とカスピ海にはさまれた南コーカサスに位置する旧ソ連構成国です。ヨーロッパとアジアを結ぶ結節点の一つで、貿易の中継地点だったことから様々な文化や食材が持ち込まれ、独自の食文化が形成されました。古くからブドウが栽培され、アルメニアと並び世界最古と言われるワインの産地です。

グルジアの予備知識を入れたところで、実際にウラジオで人気のグルジア料理の店に入ってみましょう。



ウラジオストクで大人気のレストラン“スプラ”

今回訪れたのは地元の人に大人気のグルジア料理店“スプラ”です。ガイドブックを読んだ人なら一度は目にしたことがあるかもしれませんが、でも、これから紹介するのは、恐らくまだどのガイドブックにも載っていない方のスプラです。場所は市内から金角大橋を渡ってマリンスキー劇場の先を少し行ったところ、ハリコーフスカヤ通りにあります (Ulitsa Khar'kovskaya, 8)。オープンして半年ほどしか経っていないにも関わらず大盛況。予約していたのに 20 分くらいは外で待ちました (予約の意味不明?! 笑)。でも受付でリングや無料のワインが配られるので、それを飲んで待ちましょう。

いざ店内に入ると美しい衣装の店員さんが迎えてくれます。内装も独特の美しさで、別の世界に迷いこんだような感覚になります。メニューは豊富で、ほとんどが写真付きなので指で示せば注文できて安心です。一言でグルジア料理を表現するとすれば、小麦粉オンパレード！(笑)。代表的なヒンカリ (三角形の可愛い餃子)、ハチャプリ (チーズパンてきな?) やチェブレキ (チェブラーシュカのファン歴? 因みに私はチェブ歴 3 年目です) 等々。もちろん肉や魚の料理、サラダなども豊富な種類がありますが、私のお気に入りにはチェブレキ！大きさはラグビーボール並みに巨大で雲のようにフワフワしていて、中には焼いた子牛の肉とチーズが入ってい



ます (写真)。店員さんがビニール手袋をくれるのでこれを装着してゆっくりこの雲を潰していきます。そしてクルクル丸めれば準備 OK！ここからはフォークとナイフでいただきます。私は勢いで持ち上げてかぶりつきましたが、肉汁がズボンにビシャーッ！ (笑)。ズボン 1 着失うくらいの価値があるほどの美味さでした。

チャーチャに願いを込めて

さて、ここまでは食べ物の話でしたが、ここからは美味しい料理にピッタリのお酒をご紹介します。グルジアと言えばまずはワインですね。世界最古のワイン生産地・グルジアのワインはなかなか日本で飲めないのでは是非試してもらいたいです。おすすめは赤ワイン MARANI のアラザンスカヤ。渋すぎずグルジア料理独特の香辛料とうまくマッチしています。

美味しいワインを堪能して次は何を飲もうか考えていると、現地の友人のグレフが「チャーチャを飲みますか？」と日本語で尋ねてきました。みなさんはお茶のことか？と思ったかもしれませんが、その正体はなんとグルジア版ウォッカ！やはりロシアに来たらウォッカは外せないですね。一般的なアルコール度数は 40 % ですが、田舎のお手製は 50 % もあるとか。ロシアの思い出作りに普段日本では飲まないウォッカのショットをやるのは非常に面白いと思います。

しかし、このスプラではもっと楽しく飲む方法があるんです！チャーチャを注文するとテーブルで飲むか、別の場所に移動するかと聞かれるので、是非後者を選んでみてください。ロシア語が分からなくても気さくな店員さんが連れて行ってくれると思います (笑)。ハイテンションな店員さんに連れられて店内奥の厨房前のカウンター前に行くと、その上にはなんと女神像!? よく見ると蛇口がついています (笑)。もうお分りですね。ここからチャーチャが出るのでショットグラスに注いで準備完了！と思いきや、ただ飲むのではなく、作法があるのです。まずはグラスを持って、願いを込めながら女神の鼻をこすります。それから一気に飲み干して、全員が飲み終わるとみんなで肩を組んで女神の横のベルを鳴らし、再度願いを込めます。これで終了。一緒に飲んだもう一人の友人のスラーヴァはお酒が弱いので、“生きて帰れますように”と願いを込めたに違いありません (笑)。

こんな感じでたらふく食べて飲んで初日を終わることができて、いいスタートが切れた感じです。初日はウラジオストク着が夕方なので、観光の時間がありません。まずはスプラ

に全力を注ぎましょう！！

3. ルースキー島の穴場絶景スポット “ミス・タビジナ”

さて、3 連休を使ってウラジオストクに来た人は、2 日目のフリータイムをどうしようかとネットなどで下調べをすると思います。「鷲の巣展望台」で綺麗な写真を撮りたいとか、「百貨店グム裏のお洒落なお店」を巡りたいなどと考えたでしょうが、ぶっちゃけ後回しにします。なぜかと言うと、すでにこのタイプの記事は沢山出回っていて、何よりも“混む”からです。最近では韓国の観光客で街中が溢れています。

2 日目の朝にふらっと中央広場近くの C-56 潜水艦 (博物館) を見に行ったら、狭い艦内に人がぞろぞろ入って行くのを見て東京の通勤ラッシュの電車を彷彿とさせました、、、。せっかくウラジオストクまで来たのにそんな思いはしたくないですね。

そこで、この時期の温暖な気候と綺麗な海を最大限に楽しめる場所にお連れします。

ウラジオストクの観光地は大きく 2 つに分けることができます。1 つはシベリア鉄道の終着駅やグム百貨店、鷲の巣展望台などがある古くからの市内中心部。もう一つは、最近新たに開発され、マリンスキー劇場、水族館、極東連邦大学などがあるルースキー島です。これからご紹介する絶景スポットはルースキー島にあります。

浜辺でやるバーベキューは最高！

私は現地の友人たちと計 6 人で、穴場絶景スポットを求めてルースキー島に渡りました。市内から車で金角大橋を渡り、極東連邦大学の横を通り抜け、走ること 30 分。地図を見ながら行ったのですが、ずっと直進したらまさかの行き止まり (笑)。アレっ？となって地図を見返すと途中にある小道に入らなければいけないようです。

戻って当該箇所に着くと、一切舗装されてないデコボコ道が出現！ 高低差がすごいので普通のセダンタイプの車で行くと確実に下を擦ります。けど、スプラでチャーチャを勧めてきたドライバーのグレフは上手に蛇行して車に傷をつけることなく進んで行きました (ロシア人は運転技術がすごく高いと思います)。みんながグレフの運転に安堵した矢先、“ガリガリガリガリリリリィィィ、、、” 車内は一瞬静寂に包まれ、グレフの溜息が漏れました。

中継地点の開けた展望台に着いたので小休憩。みんなでグレフを慰めました。ただし、ここにはまだ韓国人グループがチラホラ。展望台からの眺めもいいのですが、さらに奥へと進みましょう。再びデコボコ道を行くと浜辺に着きます。ここでバーベキュー！ ロシア式でやるとウォッカにシャシリク (串焼き)、黒パンにサラミ、チーズ、キュウリにトマト、といったところですが、単に飲み物とお惣菜を持っていってだけでも良いですね。食べ終わったらいよいよお目当ての絶景スポットへ出発！

キツネがついて来る自然道

ここから先は車では進めません。片道約 1.5 時間かけて徒歩でゴールを目指します。道中にキツネが現れたり、戦争中に使われていた地下トンネルの入口があったりして楽しく進めます。



そんなこんなで歩き続けてようやく、ルースキー島の先端“ミス・タビジナ”に到着！ なんと、途中で遭遇したキツネがここまでついてきました（笑）。訪れる人が餌をあげるからか人慣れしているかもしれません。ここまで頑張って歩いて疲れても、絶景を目にすれば元気がでできます。

あなたも波の音を聞きながらウラジオストクでリラックスするのはいかがでしょうか。

4. その他のお勧めインスタスポット

最後に、ウラジオストクのインスタ映えスポットをいくつか紹介します。

レストラン “ニービー・ラーダスチ” (Невинные Радости)

ガイドブックにも載っているグム百貨店裏にあるワインレストラン。壁一面に並べられた世界各国のワインボトルの美しさは必見！もちろんここから注文してテーブルで飲むことができます。また、遅い時間に行けば、食後にガラガラのグム裏で人目を気にせずインスタ映えする写真が撮り放題！ここは日中、人で溢れているので、夜に撮っておきましょう。



美しい夕焼けを求め、トカレフスキー灯台へ



5 月末は日没が 20 時半ごろなので、たっぷり遊んだ後に最後に行くのがベスト。運がよければ灯台まで渡れますが、これは潮の満ち引き次第。これを見てからレストラン“ニービー・ラーダスチ”に行くのが良いですね！

カフェ デュエット Duet

パグラーニーチナヤ通りにあるティファニースタイルのカフェ。お店は朝の 9 時から開いており、朝の時間帯は空いているので可愛い店内の写真が撮りやすいのがポイント。こんな場所でモーニングを楽しめばその日は 1 日ハッピーな気分になること間違いなし！



最後は少し駆け足になってしまいましたが、いかがだったでしょうか。これを読むまでにあなたが持っていたロシアのイメージが格段良くなったのではないのでしょうか。

今回の目玉のミス・タビジナは、個人が自力で行くのは難しいので、ロシア風バーベキューもセットにしたツアーをご提供できるようになればと思っています！是非お楽しみに！

サンクトペテルブルク留学記 遠い隣国での挑戦

H・I (JIC ロシア語講座・大阪受講生)

大学生にとって春休みというものは非常に長い。2 月にもなれば、もう授業はほとんどない。そうすると、短期留学の絶好のチャンスとなる。アメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリア、……。往々にして、英語圏の国は人気であると同時に一般的である。

しかし私が選んだのは、ほかでもないロシアであった。友人たちからは驚かれたが、第二外国語でロシア語を修め、サーモンとバレエをこよなく愛する私にとって、ロシアという国は魅力の塊でしかなかった。

こうして私は、通っていた JIC ロシア語講座からの「サンクトペテルブルク短期研修」のお知らせに飛びついたのである。申し込んでからは、ビザ申請や保険の加入、研修先の学校のプレイスメントテストなどであつという間に時間が過ぎ、いよいよ出発の日がやって来た。

日本からサンクトペテルブルクまでの直行便はないので、ロシア航空を使うとモスクワを経由して行かなければならない。日本からモスクワまでのフライト時間は約 9 時間。モスクワからペテルブルクまでは 1 時間半。乗り継ぎの待ち時間

も含めると、出発してからだいたい 14 時間程度でペテルブルクに降り立つことが出来る。

私のロシア奮闘記は、1 日目にしてすでに始まっていた。笑顔のない空港職員による入国手続き、乗り継ぎ便のゲート変更、lost baggage、……。結局ステイ先に着いたのは日付を超えた真夜中の 1 時頃であった。これほどまでにロシア語しか通じないとは、これは大変な国に来てしまったな……というのが正直な 1 日目の感想であった。

さて、それからの日々は怒涛のように過ぎていった。研修先の学校は外国人のためのロシア語学校であり、様々な国の出身の生徒たちがいた。中国、フランス、ドイツ、イタリア、……。もちろん、他の日本人留学生もいた。偶然にも日本人留学生はみな大学生だったので、すぐに



仲良くなることができた。 **フレンドリーな学校の雰囲気**

学校の 1 日は朝の 9 時 30 分から始まり、昼過ぎには授業が終わった。放課後には、観光ツアーや伝統工芸体験、歌、料理などの課外プログラムがあり、充実していた。授業と課外プログラムの間の昼休みには、私は他の日本人留学生とともに近所の食堂 (СТОЛОВАЯ) に行き、安くて美味しいランチを食べながら、授業のことやステイ先のことについてあれこれ語り合った。

授業はというと、もちろん基本的にロシア語で行われるのだが、外国人のためのロシア語学校であったので、困っていたり、理解していなかったりすると先生が英語で説明してくださった。

2 週間の現地生活の中でも特に最初の 3 日間はかなり苦しかった。何せ、自分自身がわかっている「つもり」であったからだ。しかし、単語がとっさに出てこない、語尾の変化に気が付けない、格変化がこんがらがる、……。当初は、放課後の宿題が 3 時間かけても完璧に出来たと言い切れなかった。出来ない自分が悔しくて、何度も教科書とノートを見直した。こんなに勉強したのは大学受験期以来、いやそれ以上に勉強したと思う。これらの日々は、大学生になって何となく日々を過ごしがちだった私にとって、すごく重要で価値あるものとなった。こんなにも毎日考え、真剣に授業を聴き、向上心をもって過ごしたことは、人生で初めだったかもしれない。おかげさまで、日ごとに宿泊先のホストファミリーとも会話

できるようになっていったし、お店などに行っても少しずつ自らの意志を伝えることが出来るようになっていった。



サンクトペテルブルグ、冬宮前広場

2 週間の滞在では授業以外にも様々な経験をした。初めの 1 週間はエルミタージュ美術館に行ったり、伝統工芸や歌のレッスンを受けたりして様々なロシア文化に触れた。エルミタージュは想像していた以上の広さで、とても一度で回り切ることが出来なかった。全てを見られなかったのが心残りであるが、また行きたいという強い動機となっているのでかえって良かったと思っている。

それから、忘れてはいけないのがマリインスキー劇場でのバレエ鑑賞だ。本場の「白鳥の湖」は(全幕ではなくヴァリエーションだったが)やはり美しく、感動した。ただ、終演の時間が遅く、バスも近くからは乗ることが出来なかったので、タクシーに乗らなければならなかったのは非常に緊張した瞬間であった。

日本語を学んでいるロシア人学生たちと交流できたのも非常に良い思い出だ。クンストカメラを見学してから、ネフスキー通りをぶらついた。彼女たちと途中のカフェで食べたブリヌイは格別に美味しかった。実は今も彼女らと連絡を取っており、秋には日本で会う約束もしている。彼女たちは非常に勉強熱心で、日本語も上手だからとても楽しみだ。

2 週間という時間はあっという間に過ぎていき、わたしは日に日にサンクトペテルブルクを離れるのを寂しいと感じるようになっていた。1 日目の自分に聞かせたらきっと驚くだろうが、私はすっかりロシアという国に魅了されていたのである。アメリカ人的な愛想の良さは決してないが、こちらがロシア語を話すか理解しているとみれば、他のロシア人と同じように扱ってくれる。

日本はもう真夏の暑さだが、最近は何んだかステイ先で毎日ごちそうになった温かいスープが恋しく思えてならない。今回の留学は、これから人生をあと 80 年生きるとしても、非常に貴重で、二度とないほどに充実した日々であったと思えるだろう。

頑張ってます！ JIC 報告

関空旅博に出展しました

関空旅博にブースを出しました！

5 月 18 日・19 日とジェーアイシー旅行センターとして初めて第 15 回関西空港旅行博に参加しました。

関空旅博とは、関西空港に隣接する JR と南海電鉄の駅棟内の吹き抜けスペースを利用して、国内の観光地や海外の観光局、航空会社、旅行会社などが PR を行い、セミナーやイベントなどで各観光地の魅力を伝え、旅のきっかけを作ることを目的として開催されているものです。

私自身も何度かこの旅博を見に行ったことがありますが、その時もイベントやクイズ、試食などを通して各観光地を紹介するブースが多く、楽しみながら学んだり、知ったりする工夫がされていました。屋台での軽食販売もあり、あちこちに人だかりができていました。

実は関空旅博では旅行会社の出展は少なく、各国観光局や航空会社を中心なのですが、今年は関西空港からウラジオストクへの直行便が週 2 便飛び始めたこともあり、関西地域でロシアへの関心を高めるために、ロシア専門旅行会社としてできることをやってみようと考えて出展しました。

ジェーアイシー旅行センター(株)大阪事務所は、現在女性スタッフのみで営業していることもあり、出展にあたっては以前から取り組んでいる雑貨ツアーのイメージで、親しみやすくかわいいロシアを見てもらうために、ロシアのお土産雑貨とロシアデザイナーの T シャツの販売をおこなうことにしました。またロシア旅行についてのアンケートを行い、回答者にはロシアチョコを無料で試食してもらいました。

ロシアお土産雑貨は奈良のロシア雑貨店「マールイミール」の小我野明子さんに相談し、ロシア雑貨を初めて見る人が手に取りやすいマトリョーシカやチェブラーシカ、白樺の樹皮で作った小物入れ、マトリョーシカ柄のポーチやキーホルダーなどをチョイスして送っていただきました。T シャツは京都在住の元 JIC スタッフでロシア語通訳の平井順子さんに提供をしていただきました。

ロシアチョコは、JIC のスタッフが 4 月にウラジオストクに出張した際に、地元チョコレート会社プリモールスキーカンジーチェル社で買って来てもらいました（日本人にも食べやすいワッフル入りチョコ 7kg！）。それを 2 個ずつかわいく包装しました。

前日ブースに荷物を運び入れたときに撮った写真を見たスタッフが、ブース内があまりに殺風景だったので、一晩がかりでロシア国旗の柄に似せた垂れ幕飾りを製作してくれまし



た。おかげでブースが一気にロシア的に華やかになりました。

当日は天気心配でしたが、暑くも寒くもなく過ごしやすい天気でした。各日 150 個用意したアンケートのお礼のロシアチョコは、たくさんの方にアンケート回答していただき両日とも午後 3 時までに「完売」、配布終了。チョコレートもおいしいと好評で、かわいい包装も注目の的でした。

ブースの場所がイベントスペースへの通り道だったこともあり沢山の方に足を停めて見ていただけました。ロシア雑貨や T シャツ販売のレイアウトを工夫したおかげで、マトリョーシカやチェブラーシカの写真を撮っていく人が何人も現れました。話に聞いていても実物を見たのは初めてという方も多く、チェブラーシカ型マトリョーシカは子供たちの格好のおもちゃとなり、売り物のマトリョーシカを開けたり閉めたりを繰り返す子供たちにひやひやでした。

手作り雑貨のため値段は少し高め。売れ行きは如何に？と思ったのですが、なかなかの売れ行きでした。ディスプレイ用として貸していただいた 10,000 円のチェブラーシカ型マトリョーシカは、「まさかこれは売れないだろう」と思っていたのですが、2 日目の午後にこれが売れたときは居合わせたスタッフの間でどよめきが起こりました。

さて、実際にこのイベントがジェーアイシー旅行センターのロシア旅行の宣伝として効果があったのか？と問われると、今のところそれほど効果があったのかどうか...

ただ、このようなイベントを通じて関西地域でもロシアやロシア旅行への興味や関心が少しでも高まってくれればいいなと思います。肝心の関空発の旅行商品をそれほどアピールできなかったことなどいろいろと反省すべき点もありますが、初めての関空旅博への出展がまずは盛況のうちに終わったこと、出展にあたって多くの方からアドバイスをいただき、協力していただいたことに感謝したいと思います。

小原浩子（JIC 大阪）



日ロ交流年閉幕式 大阪で開催 (6月29日)

交流継続へ、来年は「日ロ地域交流年」に！



安倍首相、プーチン大統領が参加した日ロ交流年閉会式

6月29日、大阪市のいずみホールにて、日ロ交流年（日本におけるロシア年、ロシアにおける日本年）の閉会式が、G20首脳会議に来日したプーチン大統領を迎えて、盛大に開催されました。閉会式では、安倍首相とプーチン大統領が挨拶を行うとともに、国立モスクワ室内合唱団と相馬子どもコーラスによる合唱、スピヴァコフ基金派遣若手ソリスト（ピアノとヴァイオリン）の演奏などが行われました。

安倍首相は、「この1年間にロシア国内で600以上の『日本年』交流行事が行われ、150万人以上が参加した。この成果を継続し発展させるために、日ロ両国は2020年から2021年にかけて、「日露地域・姉妹都市交流年」（日露地域交流年）を実施することで一致した」と、日ロ交流をさらに拡大させる決意を表明しました。

プーチン大統領もこれに応じ、「日ロ交流年は、政治、経済、文化、科学、教育、青年、スポーツなど様々な分野で両国の関係拡大と相互理解の強化に貢献した。日ロ地域交流年に関する両国政府の覚書が、サンクトペテルブルグ市の姉妹都市である大阪市で交わされたことに大きな意義がある」と述べました。

地域間の日ロ交流を活性化させる新たに取り組みに期待が集まります。

《ロシア情報》

ロシア文化フェスティバル 2019 開幕

今年も多彩なプログラム

今年のロシア文化フェスティバルは7月18日のエイフマンバレエ公演「ロダン〜魂を捧げた幻想」（東京文化会館）をもってオープニングを迎えます。

以下、夏から秋にかけての文化フェスティバルのプログラムを紹介します。

●エイフマンバレエ公演

7月18日、19日「ロダン〜魂を捧げた幻想」

7月20日、21日「アンナ・カレーニナ」

会場；東京文化会館／主催；朝日新聞社、ジャパン・アーツ

●スラバのスノーショー

7月19日～8月7日 大阪 Cool Japan Park 大阪TTホール

8月10日～8月25日 東京 シアター1010

www.slavasnowshow.jp

●ボリショイサーカス 2019

7月13日～15日 アオーレ長岡

7月20日～23日 島津アリーナ京都（京都府立体育館）

7月27日～8月4日 横浜文化体育館

8月8日～12日 幕張メッセ・イベントホール

8月15日～19日 千葉・流山市民総合体育館

8月22日～26日 ドルフィンズアリーナ（愛知県立体育館）

問合せ；ボリショイサーカス公演本部 TEL03-3234-7807

●テルミン発明 100 年記念 日露合同コンサート

9月15日 神戸芸術センター・ショパンホール

9月17日 横浜市鶴見区民センター サルビアホール

主催；マンダリンエレクトロン TEL: 053-487-1993

●アントン・チェーホフ作「三人姉妹」

10月18日～20日 東京芸術劇場

問合せ；東京芸術劇場ボックスオフィス 0570-010-296

●ロシア民族楽器アンサンブル

10月23日 「ドン・トリオ」コンサート

会場；ティアラこうとう小ホール

10月27日 北川記念ロシア民族楽器オーケストラ

会場；ティアラこうとう大ホール

主催；北川記念ロシア民族楽器オーケストラ 東京労音

その他たくさんのコンサート、オペラ、バレエなどの公演が予定されています。

プログラムの日程および詳細は、ロシア文化フェスティバル日本組織委員会のホームページ等でご確認ください。

<http://russian-festival.net/program.html>

前号(19 年 4 月、第 201 号)で紹介したように、日本とウラジオストク『対岸を結ぶ架け橋に』と、日ロ合同エッセイ集(日本語/ロシア語)の発行準備が進められています。今回は、その紹介第 2 弾。翻訳と編集に携わっておられる榎本真奈美さんに投稿していただきました。(編集部)



牡丹を輸入するエレナさん

日ロ合同エッセイ集

「2時間で逢えるウラジオストク-日本」(仮題)

榎本 真奈美 (同志社大学講師)

日本とウラジオストクを結ぶエッセイ集『2 時間で逢えるウラジオストク-日本』(仮題) から、数名のエッセイの一部を抜粋してご紹介します。

エレナ・アンドレーエヴァ

島根牡丹公式卸売業者
社会事業「日本とロシアをつなぐ花の道」代表

私は国際フラワーアレンジメント協会「APT・フローラ」で学び、モダンフラワーアレンジメントのコースを修了しました。その結果、国際的レベルの技能証明書を持って国際展覧会に自分の作品を出品することもできました。まもなくして、ウラジオストクの日本センターで、新潟県の生け花師範会幹部の一員である上野恒洲さんの指導のもとで生け花を勉強しました。

生け花のおかげで、私は他の日本文化の奇跡、牡丹の木にめぐり逢いました。京都の展覧会でこの素晴らしい花を見て、私はたちまちこの花に惚れこんでしまい、牡丹の木を沿海地方に輸出したくてたまらなくなったのです。翌年には、日本の専門家たちと共にウラジオストク郊外で牡丹の苗 100 本を植えました。現在私が運営する会社では、Papa Botan の商標で牡丹をロシアへ輸入しています。また、並行して社会事業「日本とロシアをつなぐ花の道」(または「島根とロシアの花の道」)を展開し始めました。

私の家族と日本との親密な結びつきが始まったのは、私が生まれるずっと前でした。1945 年に、私の祖父フィリップと祖母のマリヤは、タイガの奥深い森林伐採地で後方部隊として働いていました。沿海地方のアヌチンスキー地区にあるテリャンズ村は、木材の調達地点で、日本人捕虜が連れてこられた場所でした。仕事は重労働で、ロシア人と日本人は同じように仕事をこなしました。男たちの隣で弱いロシア人の娘たちが働いており、その中に私の祖母がいました。このことに日本人はとても驚き、こうした過酷な仕事を罰として行

っているとすれば、一体何をしてここまでの罰を受けるのかと言ったそうです。私がおばあちゃんに尋ねてみると、どれほど大変だったのか、いつも笑って言うのです。「何を言うの、みんなと同じ普通の仕事だったわ。私たちは働いて、歌を歌ったわ。青春の、いい時代だったわ」と。

祖父は日本人グループの班長をしており、仲良く過ごしました。至る所で飢え、日本人は蛇の食べ方を祖父に教え、配給された僅かな米を分かち合いました。ロシア人は班ごとにパンとミルクを運んできました。日本人捕虜の中に、サカイさんという名前の医者が出て、ロシア語を知っていたといえます。それで祖父は日本人と沢山話ができたそうです。当時、祖母にはすでに 2 歳の娘がいて、私の叔母、リュダです。ある日リュダは重い病気にかかり、周囲はもう助からないと思っていました。薬はありませんでした。祖父は悲しみ、サカイさんに打ち明けると、サカイさんが助けを申し出てくれました。日本人の配給品の中に薬があったのです。祖父がサカイさんを家に連れて来ると、この日本人は少女の命のために何週間も奮闘し、病気に打ち勝ったのです。日本人の友人に感謝をして、祖父は休日になると家に連れて来るようになり、とても多くの時間を共に過ごしました。サカイさんは、ロシア人の生活に関心を持ってよく観察していたそうです。また、私の祖母(当時 19 歳で、身長は 162 cm だった)が皆と同じように木を切り倒しているのを見て、とても憐れんでいました。ある日、サカイさんは祖父に祖母の肖像画を描いてもよいかと頼んだのですが、彼は腕のある絵描きでもあったのです。当時、お店で使う紙袋用の包装紙を切った紙に、サカイさんは色鉛筆で木綿のワンピースを着た祖母を描きました。祖母がモデルになった時に着ていたワンピースは、水色のヤグルマギクの様子がついていたのですが、絵の中の模様は桜の花でした。そして、「画家サカイ」とサインをしました。サカイさんは故郷をととても懐かしがっていたそうです。その後私たちは、日本でサカイさんを探したかったのですが、再びこの友達と会うことなく祖父は亡くなってしまいました。一方、祖母は今でも健在で、日本人が我が家に遊びに来る時

はいつもやって来て、皆と一緒に「カチューシャ」を歌っています。

ヴィターリー・ヴェルケエンコ

元ウラジオストク市長
「スモウトリ」社長

日本人がウラジオストクに関して持つイメージの多くがステレオタイプである。寒い、虎、熊。何十、何百人もの日本人に新生ロシアとウラジオストクに対する見方を変えて欲しくて、その真実の姿を伝えるべく私は相当の力を入れた。私はロシアと日本の友好を強め、互いがもっと親密になることを願った。多くの出会いや公の場で話す機会もあった。

一方で、我々ロシア人も自らの馬鹿げた印象を残しているのではないかと。90年代、ロシア人に対する考えは港町で形成された。車を求めるハンターたちが、いなごの群れのようにやって来ては駐車場を歩きまわり、カーマットを盗んだり、変速ギアのスuspensionアームからシフトレバーを回し盗ったりしていた。また、水兵や漁師、偽漁師たちは大酒を飲んで喧嘩騒ぎを起こしたりした。日本人はこうした無作法な事柄に肌感覚で傷ついていたのだ。伏木、富山、新潟では、こうしたロシア人の厄介ごとが多くて非難された。このことから、心痛を伴うほど私はショックを受けた。

私は日本の温泉が好きで、機会があれば必ず入りに行く。ある日、伏木に隣接する金沢で、壮大なガラス張りの丸天井がある素晴らしいスパ温泉に行った。海賊船や滝、小川といったデザインが温泉施設に特別な魅力を加えている。屋外の湯船に浸かり、その後再び屋内の湯船に入る。サウナに行くのも喫茶室に行くのもよし。一日があっという間に過ぎてしまう。外国人もたくさんいるが、ここで独特な「観光名所」をご紹介します。ロシア語で大きく書かれた注意書きがあるのだ。「湯船におしっこをしてはいけません」と。英語でも中国語でもパキスタン語でも書かれていないのに、ロシア語のみで書かれていた。つまり、ロシア人に悩まされたということだ！

ある日、私は偶然、車体に赤いカンガルーが目印の西濃運輸が所有する大型トラックの停留所に行く機会があった。キャビンに座ってもいいかどうか、私は尋ねた。というのも、私は子どもの頃から長距離トラックの運転手になりたかったのだ！私の子どもの頃からの夢と実業家としての経験、すべてがひとつの点に合わさり、その時に思った。これぞまさに私がやりたいことであり、輸入すべきはこれだ、と。そこで同時に、日本人の手を握って「売ってくれるまでここから出ませんよ、こんなトラックが必要なんです！」と私は言った。言葉の限りを尽くして説得し、それまではこの会社が行って



西濃運輸のトラック輸入に成功 ヴェルケエンコさん(中央)

いなかった、親会社から輸送トラックを輸出することに賛成してくれた。私にとってそれは夢の極致だった！

「でも、ひとつ条件があります。輸出前に完全にメンテナンスを行います」とは日本人の言葉。

これもまた、ビジネスにおける日本文化のひとつの特徴だ。悪くなったものを厄介払いするのではなく、品質に責任を持つ。ましてや、二万三千台のトラックがある親会社から輸出されるのでなおさらだ！

徐々に、「HINO・ウラジオストク」は持ち株会社「スモウトリ」に成長していった。(翻訳 樫本)

木村 清

株式会社喜代村「すしざんまい」代表取締役

「マグロ大王」と呼ばれる私の原点は、貧しかった子ども時代にあります。母は子どもたちに少しでもおいしいものを食べさせたいと、あるとき、法事で出されたマグロの刺身を二切れ、家に持ち帰ってきてくれたのです。二片の刺身をさらに半分に切って、家族四人で分け合って食べました。そのときのマグロの味は忘れられません。将来はおふくろにおなかいっぱいマグロを食べさせたい、と強く思いました。ですから私にとってマグロは特別な魚なのです。

ロシアでは、メドベージェフ首相やロシア上院議長のマトヴィエンコ氏、農林副大臣で漁業庁長官のシェスタコフ氏ら、要人の方々にもお会いしています。プーチン大統領の友人で、2013年にロシア国籍を取得したフランスの映画スター、ジェラルド・ドパルデューにも会いました。みんな私に会いたいと言ってくる。もちろん、ハラショーですよ！

日本では、ロシア進出を躊躇する企業が少なくありません。ロシアでのビジネスはリスクが高い、と尻込みしているのです。しかし、ロシア人が日本人のことを何と言っているか知っていますか？

「日本人は嘘つきだ。品物を買っても代金を払わない。値切る、

クレームをつける。とんでもない国だ!」。

一方、日本人がロシア人のことを何と言っているのでしょうか?
「ロシア人から品物を買っても、約束したものが届かない。遅い、余所に売ってしまう」。

お互い、疑心暗鬼になりながらビジネスをしているわけです。それなら、私がやってみよう、と思ったのです。騙すなら騙してみよう、一度や二度なら騙されてやろう、と。その代わり、私は真実一路、本気で相手に向き合います。本気で付き合わないければ、信頼関係は築けません。腹の中で思っていることは、透けて見えます。それはどこの国の人でも同じです。砂漠に住む人であろうと北極のエスキモーであろうと、下心があれば、それは私の本能が察知します。



ペテルブルグ市長 (当時) マトヴィエンコさんと木村社長

私はこれまで、アフリカや中南米などでもマグロ外交を展開してきました。なかには国が交渉に向くまで、日本との関わりがほとんどなかった国もあります。私の場合、そういう国に飛び込んでいって失敗したことは一度もありません。

日本の最新技術をもってすれば、ロシアで水産加工のインフラ改善をすることもできます。そして、日本で自社チェーン店「すしざんまい」がロシアから鮮度と活きの良い海産物を仕入れるのです。

もちろん私は、ロシアの皆さんにも新鮮な魚を食べて欲しいと考えており、現在、ウラジオストクで「すしざんまい」の店が開けないか検討しています。

一言でいうと、「マグロ外交」で世界を平和に!



杉原千畝と「命のビザ」

カウナスの杉原記念館 シモナス館長が来日

第二次大戦中、ナチス・ドイツの迫害から逃れて来た多くのユダヤ難民に本国の指示に反して日本通過ビザを発給し、6000 人以上の命を救った外交官・杉原千畝については、本紙 197 号 (2018 年 7 月) で紹介しました。「命のビザ」と杉原千畝の功績を伝える杉原記念館 (リトアニア・カウナス) の館長、シモナス・ドヴィダヴィシュスさんが 5 月 18 日から 30 日まで来日しました。JIC は、昨年「悪魔の飽食」合唱団バルト三国公演ツアーでお世話になった縁で、シモナス館長の日本訪問と滞在日程アレンジに協力しました。

日本国内には、ユダヤ人難民たちが上陸した福井県敦賀港、杉原千畝の生まれ故郷・岐阜県八百津町、杉原が学んだ名古屋市の瑞陵高校、東京の早稲田大学などに資料館や顕彰碑があります。またつい最近東京・八重洲口にもセン

ポ・ミュージアムが開設されました。シモナス館長はそれらすべての関係施設を訪問し、また敦賀市長、八百津町長、愛知県知事、日本リトアニア友好協会 (水野誠一会長)、日本リトアニア友好議員連盟 (会長: 中曽根弘文参議院議員)、元駐リトアニア大使白石和子氏ら多くの関係者と会って、今後の協力について懇談しました。

以下、今回シモナス館長とともに訪れた杉原千畝に関する諸施設を紹介します。



「人道の港 敦賀ムゼウム」(福井県敦賀市)

杉原千畝が発給した「命のビザ」を手にしてユダヤ人難民たちが 1940 年から 41 年にかけて上陸したのが福井県敦賀港。ムゼウムには、当時、欧亜国際連絡列車の窓口であった敦賀港の歴史や、杉原千畝の「命のビザ」、敦賀港に上陸したユダヤ人難民たちを市民がどのように受入れたかといった資料が展示されています。特に、当時を知る市民たちの証言を多数集め、着の身着のままの難民たちにリンゴを配ったり、銭湯



学生たちとともに早稲田大学構内の顕彰碑の前で
を開放したりしたエピソードが展示されているのが心を打ち
ます。(なお、敦賀ムゼウムには、ロシア革命後シベリアに取り
残されたポーランド孤児たち 763 人を 1920 年に日本赤十
字の救援活動で敦賀に受入れた際の資料も展示されており、
それらを合わせて「人道の港」という名称が冠されています)。
開館時間 9:00~17:00/年末年始以外は無休/協力金 100 円

「杉原千畝記念館」(岐阜県八百津町)

杉原千畝が生まれ育った八百津町に日本で最初に開設され
た杉原記念館です。ユダヤ人迫害の実態やホロコーストの歴
史、外交官としての杉原千畝の仕事と「命のビザ」発給に至
った経緯、その後のユダヤ難民たちの逃避ルート、敦賀上陸
後の行方などが順を追って展示・説明されています。記念館
は八百津の町を見はらす「人道の丘」展望台にあります。
開館時間 9:30~17:00/月曜休館(月曜が休日の場合は翌日)
/入館料 300 円

「杉原千畝広場 センポ・スギハラ・メモリアル」

(名古屋市瑞穂区、愛知県立瑞陵高校内)

杉原千畝は名古屋の古渡尋常小学校と第五中学校(現県立
瑞陵高校)で約 10 年間学びました。杉原千畝広場は母校・
瑞陵高校の正門西に設置されています。中央にユダヤ人家族
にビザを手渡す杉原千畝のブロンズ像があり、その周囲に杉
原の人間形成の時代、外交官としての任務、人道主義による
決断、ビザ発給と難民たちの行路などが、セラミック・コピ
ーで鮮明に展示されています。とくに、杉原が発給したビザ
の全リスト(外務省外交史料館提供)が展示されていること
と、この広場が市民の誰もが自由に出入りできるオープン型
の展示施設であることが大きな特徴です。

早稲田大学杉原千畝顕彰会とブリッジングプロジェクト

杉原千畝は 1918 年に早稲田大学高等師範部英語科に入学
し、翌年外務省の官費留学生に採用されハルビンの日露協会
学校に留学しました。杉原が在籍した早稲田大学にも大学

OB や政財界有志によって顕彰会が作られ、2011 年 10 月に
杉原のレリーフ像をつけた顕彰碑が設置されました(記念碑
は早稲田キャンパスの 11 号館と 14 号館の間にあります)。

早稲田大学には「千畝ブリッジングプロジェクト」という
学生ボランティア団体があり、シンポジウムや写真展等を開
催しているほか、毎年、学生たちがカウナスの杉原記念館を
訪れ、館内の壁紙の張り替え、資料や書類の整理などの奉仕
作業を行っています。

今回のシモナス館長の訪問に際しても、学生たちの代表と
の交歓会が行われました(左の写真)。

「杉原千畝 センポ・ミュージアム」(東京都中央区八重洲)

杉原千畝の業績を伝える一般的な展示施設がこれまで東京
にはなかったのですが、杉原の孫のまどかさんらが運営する
NPO「杉原千畝命のビザ」によって、東京駅のすぐ近くに「セ
ンポ・ミュージアム」が本年 3 月 20 日に開設されました。同
館には、杉原が発給したビザや杉原の晩年の手記など約 70
点が展示されています。

開館時間 11:00~17:00/月・火曜休館(祝日は開館)/入館
料 500 円

「外務省・外交史料館」(東京都港区麻布台)

入館と資料の閲覧には手続きが必要ですが、外務省の記録
を中心とした戦前・戦後の外交史料が収蔵されており、その中
には杉原千畝がカウナス、プラハ、ケーニヒスベルグ、ブカレスト
などで外交官として仕事をした時の記録や史料も含まれていま
す。また、2000 年に正式に名誉回復された際に設置された杉
原千畝の顕彰プレートがあります。

開館時間 10:00~17:00/土日祝日、年末年始は休館

* * *

なお、JIC と杉原千畝との関係は実は古く、JIC 国際親善
交流センターを設立した故上田卓三会長は、1999 年から
2000 年にかけて「杉原千畝生誕 100 年記念事業」(実行委員
長:明石康・元国連事務次長)を大規模に行いました。アメ
リカのユダヤ人団体 ADL (Anti-Defamation League/反差別
連盟)と協力し、国内各新聞社の協賛も得て日本各地の百貨
店で 1 年間にわたり「杉原千畝展」を開催し、「訓令違反」
を理由に「命のビザ」の事実とその功績を戦後 50 年以上に
わたって黙殺していた日本外務省に対して「杉原千畝の名誉
回復運動」を強力に展開したのです。

その結果として、2000 年 10 月に日本外務省は公式に杉原
千畝の名誉回復を行い、外交史料館に顕彰プレートを設置し
ました。

今回、シモナス館長の日本訪問を JIC が全面的にバックア
ップして協力した背景には、故上田卓三会長のこのような活
動と遺志があったことを申し添えておきます。

伏田昌義 (JIC 国際親善交流センター副会長)

6 月 15 日、東京 YWCA 会館(お茶の水)にて日ロ交流協会主催の講演会が開催されました。講師は鳩山紀一郎・長岡技術科学大学特任准教授。鳩山氏は都市交通の専門家で、2008 年 2 月から客員研究員としてモスクワ大学に 3 年間在籍していた間に「モスクワの交通渋滞改善対策に関するレポート」をまとめて政策提言を行い、モスクワの交通環境改善に貢献されたことがよく知られています。

講演では、ロシア生活で体験したカルチャーショックやロシア人気質などを前置きに、モスクワの交通環境の問題点と最近の変化がわかりやすく興味深く語られました。以下、紙面の関係上、モスクワの交通環境改善の取組みに絞って、講演録を日ロ交流協会の了解を得て掲載します(編集部)



モスクワの交通環境改善の取組み

～社会インフラとロシア人の気質～

鳩山紀一郎(工学博士、長岡技術科学大学・特任准教授)

簡単に自己紹介しておきます。私の専門は交通計画、交通工学、都市計画などで、最近では環境心理学なども研究しています。2008 年 2 月から 3 年間、モスクワ大学の経営管理学部(現在はビジネススクール)の客員研究員としてモスクワに滞在しました。2011 年 6 月から東大工学部にもどり、現在は長岡技術科学大学で特任准教授をしています。研究テーマは、交通渋滞対策、大規模災害時の避難交通マネジメントなどですが、その他にもいろいろ取り組んでいます。

モスクワの交通環境とその問題点

モスクワの交通渋滞改善対策についてご紹介します。私がモスクワに滞在した約 10 年前の状況と、最近のモスクワ交通事情の変化を、併せて紹介したいと思います。

モスクワの交通環境の問題点

モスクワの交通環境を分析した時に、私は 3 つのグループに分けて問題点を分類しました。

第 1 はドライバーの行動特性における問題、第 2 は交通システムにおける問題、第 3 は社会システムにおける問題です。

(1) ドライバーの行動特性における問題

ドライバーの行動特性では、まずは「交差点に押し寄せる」という性質がありました。よく見受けられる光景は、広い大きな道路から左折(日本では右折)する時に、左折先に一車線しかないのに交差点にどんどん車が入ってきて道を塞ぎ、信号が変わっても直進車が動けないという状況です。この先どうなるかわからないとか、信号が強制的に止められるかもしれないとか、いろんな不確定要素がある中での行動なのかもしれませんが、交差点にどんどん車が入ってきてしまうという光景がよくありました。

二つ目の行動特性は「割り込みをする」。ロシア式の割り込みは大胆な割り込みでして、例えば、オクチャブリスカヤ(十月広場)の交差点で左折待ちをしている車がある。左折した先には一車線しかないのに、左折待ちのレーンも一つしかない。なのに、左折待ちの車の列を右から追い越して先頭の左折車の前に次々と割り込んだ車が五列ほども並んでしまう。「ロシアの行列は前から伸びる」とロシア人から聞いたことがありますが(笑)、交差点でもどんどん前の方から割りこんでいくわけです。一番後ろにいるといつまでも待ち続けなければならないことになる。ところが、これがまたロシアの面白いところで、後ろに並んでいる人たちは「何か理由があって急いでいるんだろう」と割り込みを受け入れるところもあって、こういった状況がなかなか変わりませんでした。



交差点に押し寄せて進路をふさぐ車の列

もう一つの特性は「路上駐車をする」。これは当時の 10 年前の話です。2 車線の道路なのに、両サイドに路上駐車をするので、一車線分しか通れなくなった道路があちこちにありました。学術的に言うと、一車線の道路と二車線の道路だと、通行できる

車の量は約 3 倍になります。逆に言うと、二車線が一車線になると容量は三分の一になる。これは追い抜きができないからです。一車線だと追い抜きができず、前に遅い車がいると後ろの車も遅くなってしまうのです。

道の両側に車が駐停車して、道路の容量が減ってしまった箇所がたくさんあったわけですが、後に申し上げるように、路上駐車に関しては最近のモスクワはかなり改善されてきています。

(2) 交通システムにおける問題

交通システム上の問題もありました。一つ目は、「非合理的な信号現示設計」。曲がっていいのか、曲がってはいけないのか、わかりにくい信号が多かったり、どう考えてもこの青信号の長さでは車がさばけないと思われる信号設計がなされていたり、そういう箇所がかなりありました。日本では時間帯に応じて信号設定を変えることも多いのですが、そういうところはあまりありませんでした。

「わかりにくい左折の仕方」。大通りから左折をしようとした時に、直接左折をさせてくれない。ちょっと直進してから U ターンして右折させるとか、右折してから U ターンさせるとか、あるいは側道に一旦入ってから左折をさせるとか（これは私にとっては一番意味不明なんです）、わかりにくい交差点が多いです。何故こういう左折の仕方をさせるのか。「左折は邪魔な交通であって、とにかく直進する車を速く流すことに重点を置いたのかな」と思ったりしますが、結局 U ターンする地点で車は速度を落とすので、そこまで意味はないという気がします。こういう左折の仕方をさせるということは明らかに道路に負荷をかけていると思います。

「急激に変化する車線の数」。ガーデン・リングと呼ばれるモスクワの骨格の一つをなす環状道路の一部分に、8 車線あった道路が急に 4 車線になり、そのあとさらに 3 車線になる場所があります。これはその先にアンダーパス(トンネル)があって、そこが 3 車線に制約されているのでこうなるのですが、道路の車線が途中で急に変わる例もよくありました。これを交通シミュレーション・ソフトで解析してみると、一気に車線数を絞ると渋滞がどんどん延びていく。一方で、徐々に車線を絞った場合、最初から車線数を 3 車線にしておいた場合の方が、一気に車線を絞るよりも渋滞が少なくスムーズに車が流れる可能性があるという結果が得られました。

ブレーキを踏む車が多くなればなるほど渋滞が増え、ブレーキを踏む車の数が減れば渋滞も少なくなる。したがって、急に車線が減少すると、車線変更のためにブレーキを踏む車が増えるので、あっという間に渋滞してしまうわけです。シミュレーションすればすぐわかることです。にもかかわらず、当時はそのように車線が急激に狭まる場所がいっぱいありました。

(3) 社会システムにおける問題

「交通事故が起きた時の対応が遅い」。当時は事故が起きても警察官がなかなか来ませんでした。事故を起こすと、警察の現場検証が終了するまで、そのまま現場を保存しておかなけれ

ばならない。本当は動かしてもいいのですが、動かすとあとで警察が来て保険の証明書を書いてもらう時に難しい状況が起きるかもしれないので、ドライバーたちは動かさない。車が道を塞いだままでの状態で警察を呼ぶ。しかし、下手すると 2 時間くらい警察は来ない(笑)。その間ずっと車が堰き止められる。このようなことがよくありました。

また、これもよく見た光景ですが、トラム(路面電車)の軌道の中で事故が起きる。路面電車は関係ないのですが、軌道の中で車と車が事故を起こすと、車を動かさないでトラムが動けなくなる。このように公共交通の動きが車の事故によって脅かされるということもあって、それが公共交通に頼りにくい一つの理由なのかなと思ったりもします。

「予期せぬ道路封鎖」、「故障車による道路閉塞」などもよく起こります。最近では少なくなっていると思いますが、何かよくわからないけど長い間赤信号で待たされるという状況がよくありました。なんでこんなに待たされてるのかと思うと、信号の前に警察官がいて赤信号をずっと出している。しばらく待っていると黒塗りのお偉いさんの車が走り抜けていく。最近では、お偉いさんの動きを監視する NPO が出てきて、「誰が、いつ、どこを通った」と批判されたりするので、こういう道路封鎖は減ってきていると聞きますけれども、当時はよく見られました。

提案した交通渋滞改善対策

こういう問題を解決するにはどうしたらいいのかということで、考えた改善策をまとめて、当時のモスクワ市の交通局長と共著で本を出版しました。この本で私の提示した改善策は、大きく以下の 3 点です。

交通流動の適正化事業

「交通流動調査の実施」。当時モスクワでは、そもそも車がどう動いているか、車に限らず人々がどう動いているかという調査をあまりしていなかった。本来は交通流動調査をまずやるべきで、それに基づいた改善計画を立てていかなければいけないと提案しました。

「交通管制システムによる信号の中央制御」。信号のシステムを統括する機関はモスクワにもあるのですが、そこでやっていたことは、例えば破損した信号を直すとか、外から要請に応じて赤信号で流れを止めるとかといったことでした。交通の流れを良くするための管制システムはほとんどなかった。日本でやっているような交通管制システムによる中央制御が必要ではないかと考えました。

「右左折車の動線設計のコンサルティング」。これは、先ほど右左折がややこしいと申し上げたことへの対応策です。

交通インフラの改善事業

「駐車場の整備と運用」。まずは駐車場を作れと提案しまし

た。交通環境の改善策をロシア的に考えると、すぐに違法駐車を取締まれということになるのですが(笑)、その前に車を停められる場所を作ってから取締まらなければ駄目だということです。

ユーザーの啓発と取締り補助

「停止禁止箇所の取締り」。ロシアのユーザー(ドライバーたち)は、交差点の手前とか、そもそも『こんなとこ停めちゃダメでしょう』というようなところに車を停めてしまうことが多いので(笑)、ここは明確に取締まる必要があります。

「渋滞改善隊(交通監視員)の設置と運営」。これは交通対策だけを専門に考える警察のようなものを置いたらどうかという提案です。違反者から賄賂をせしめるための交通警察ではなくて(笑)、渋滞をなくすためにどうしたらいいかを考える交通警察ですね。

「ITSによるドライバーへの情報提供」や「事故処理・故障車処理のスピードアップ」もやるべきだと提案しました。

停止禁止箇所の取締まりで補足すると、例えばイギリスのロンドンでは Yellow Box といって、道路上に停止禁止区間が黄色い箱で表わされている。ここに車が入って停まっていると、監視カメラが作動して注意を受けるとか、下手をすると違反金を取られるというシステムです。こういうものを紹介しました。

また、「スマートドライブ」ということも提案しました。車だけが快適に走ればいいというのではなく、自転車も、歩行者も、公共バスも、警察車も、いろんな交通機関の人たちがお互いに尊敬し合って行動をとれるような空間に道路を変えていかなければならないというような話を、この本のなかでは訴えてみました。

近年のモスクワの空間改善

あれから 10 年後、最近のモスクワがどうなったか。最近モスクワではいろんな面白いことが起きています。今のモスクワの都市交通が実際にどうなっているかということを、少し紹介したいと思います。

最近導入された都市交通施策

最近導入された都市交通施策を列举してみます。

- (1)バス専用レーンの導入と取締り強化
- (2)路上駐車の有料化と取締り強化
- (3)歩行者空間の充実
- (4)IT を駆使した公共交通の利便性向上方策
- (5)シェアリングエコノミーの導入
- (6)IT を駆使したタクシー革命
- (7)モスクワ中央環状鉄道の開業
- (8)公共交通指向型の都市開発
- (9)高度な信号システムの導入

こういった施策が最近モスクワで取り入れられ、急速に実施されつつあります。

バス専用レーンの導入と取締り強化

バス専用レーンには A という大きな字が書かれています。ロシア語でバスはアフトーブスと言う。アフトーブスの A。この車線を普通の自動車が走るとカメラに撮られて罰金をとられる。そういう形で公共交通のスピードアップが図られ始めています。



路上駐車の有料化と取締り強化

路上駐車はしにくくなっており、路上駐車できる場所と駐車できない場所の区別がはっきりつけられてきています。駐車スペースには番号が振られていて、スマートフォンで支払いができるので、便利です。しかし支払いを怠ると、巡回している警察官によって違反切符が切られる。パトカーから撮った写真で車のナンバーが自動的に抽出され、「どこに何分間違法駐車してたから、違反金をいくら払いなさい」といった通知が自動的に送られてくる。このようなシステムが導入されています。

先ほど紹介したオクチャブリスカヤ交差点の最近の様子をグーグルマップで見ると、以前は至るところで路上駐車があったのですが、最近では駐車できる場所が限定されて、違法駐車車はほとんど見られなくなっています。逆に、歩行者の空間がかなり広くとられて確保されています。車線も効率化されて、バス車線がはっきり区分されています。

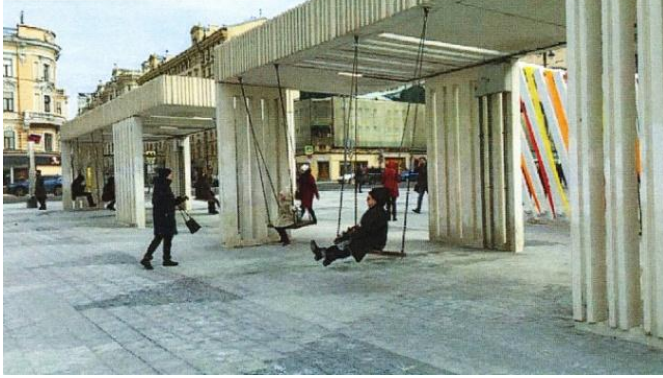
驚いたのは、交差点に Yellow Box が作られ始めていることです。オクチャブリスカヤ交差点の場合は、公共バスが U ターンする空間を確保するためと、渋滞中でも交差点を突き切って直進できるようにするために Yellow Box が設定されています。公共交通がスムーズに走れる空間をきっちり取るということは、非常によい状況です。

ちなみに 10 年前は一車線しかなかった左折車線は、二車線に増えています。左折した先の車線も二車線になっているので、実態に応じた車線の設計がなされていると考えていいと思います。

歩行者空間の充実

歩行者空間もどんどん便利になっています。実際に、車道だったところが歩行者専用道路に変わったりしています。マヤコフ

駅前広場に創られた 巨大なブランコ型ベンチ



8車線あった車道が4車線 になり、歩道が大幅に拡幅



スカヤ駅の駅前広場には巨大なブランコ型のベンチができていて、新しい待ち合わせ場所みたいな雰囲気になっていたり、面白い空間設計が出現しています。かつて8車線あったガーデン・リングは、今は4車線に減っていて、その分歩道が大幅に拡幅されています。8車線を急激に4車線に狭めて交通渋滞を起こすよりは最初から4車線の方がまだ車はスムーズに流れる可能性が高いという提言が通じたのか、歩行者空間をより多くとる道路設計に変わってきています。

IT を駆使した公共交通の利便性向上方策

公共交通位置情報提供とルート検索のアプリサービスが始まっています。昔はバスが今どこを走っていて何分後に来るのか全然わからなかった。トロリーも路面電車もそうだった。情報が与えられず、ひたすら待つしかありませんでした。したがって、公共交通は非常に不便であると思われていたわけです。

最近では、各バスや路面電車に搭載された GPS データをオープン化して、このようなアプリが民間ベースで作られ、どこに何番のバスがいるか画面で一目でわかるようになった。何分後にバスが来るということが正確にわかるようになり、同時に自分が今いる場所から目的地に行くルートがすぐに検索ができるようになったので、公共交通がとても便利になってきています。

IT を駆使したタクシー革命

タクシーも進化しています。昔は「白タク」ばかりでした。路上で手を上げると、その辺の車が停まって、「どこへ行く」、「いくらで行く」と交渉して、目的地まで乗って行っていた。もちろんタク

シー会社がなかったわけではないのですが、そもそも台数が少なく、タクシー会社に電話してもいつ来るかわからない。いわゆる「白タク」が圧倒的に多かったわけです。

ところが、最近はアプリですぐタクシーを呼べるし、実際すぐ来ます。競争率が高くなって価格競争も起きており、すごく安くもなりました。アメリカにおける Uber と同じようなシステムで、Yandex Taxi と Citymobil という大手の予約アプリがあります。今いる場所からどこまで行くと打ち込むと、料金やタクシーの到着時間、ドライバー情報などが届き、予約するとほぼ時間通りにタクシーが来るのです。



シェアリングエコノミーの導入

街中にはレンタサイクルもあります。サイクルシェアとも言いますが、ヨーロッパやアメリカではもう当たり前のシステムです。それがロシアにもどんどん入っている。カーシェアリングも入ってきているし、Uber には Uber Eats という食事の宅配サービスがありますが、それと同じものが Yandex Eda といってモスクワにも入っています。日本はいつの間にかロシアよりも遅れているかもしれないという状況です。



シェアサイクルシステム

面白いことに、足で蹴って走るキックスケーターのシェアリングもすでにモスクワで始まっています。これも欧米では既にかくさんの人が使っています。

日本では、警察がこれを道路で使ってはダメだと言いました。

だからキックスクーターを見ないのですが、そのうち「やっぱり、いい」ということになるのではないかと思います(笑)。

モスクワ中央環状鉄道の開業

モスクワ中央環状鉄道(MMK)は、2016 年に開業しました。メトロではなく東京の山手線のように地上を走る環状線です。ドイツのシーメンス製の車両が走っています。ロシア広軌 1520mm なので、車内はとても広々としています。車内空間に余裕があるので、自転車も乗せられます。



公共交通指向型の都市開発

ボタニチェスキー・サド(植物園)というモスクワ中央環状鉄道の駅の周りで、最近、公共交通を指向した都市開発の試みがなされています。これは何かというと、駅の隣接地で住宅・マンションの開発を行う試みです。日本の日建設という会社が一部協力して、すでに工事が進められ、いくつかマンションが出来上がっています。こういう便利な都市開発の試みも最近は進められています。

高度な信号システムの導入

高度な交通信号システムの導入では、日本の京三製作所と野村総研がモスクワ市と協働で実証実験を行っています。信号をコントロールして、交通量の計算をもとに青信号と赤信号の時間に反映させるシステムなのですが、中央管制でなくてもその現場で計算して最適な青信号の時間を決めるというのがこのシステムの特徴です。実際に一部地域で導入して、なかなかいい効果が得られたと報告されています。

おわりに～今後の日ロ交流の可能性

モスクワの交通環境の問題とそれに対する最近の対策について、ある意味では日本を追い越すような対策が取られてきていることを紹介しました。最後に、今後の日ロの交流の可能性と言えば少し大袈裟ですが、私なりに最近思っていることを申し上げて話を終わりたいと思います。

「進んだ日本」「遅れたロシア」という間違った発想

ロシアと交流をする際に、ロシアは技術的に遅れていて日本の技術を必要としていると思って、ロシアとの交流を考える人たちがよくいます。安倍首相が 2016 年 5 月に提案した「8 項目の日ロ経済協力プラン」では、医療、都市環境、中小企業、エネルギー、先端技術、人的交流といった 8 項目の分野での協力が謳われています。ところが経済協力というと、進んだ日本側が遅れているロシアに何か施すかのような、そんな立場で日ロの交流や協力に関わろうとする人たちが多く、私が関わっている日ロ大学間交流でもそういう空気を感じることがあります。「教えてあげろ」というような考え方でやっている人に対しては、「それは違います」と言いたい。先ほど紹介したように、よほどロシアの方が日本より進んでいる面もあります。いろんな試みをどんどんやっています。

大胆な発想で新しい試みに挑戦しています。そんな彼らからしてみれば日本は単に One of them なのです。いろんな相手がいる中で、日本を選んでもらわなければいけないのですが、日本側がこういう態度で行くと交流はうまくいかないのです。

ロシアの発想力 × 日本のマネジメント力で 日ロ交流の拡大を！

私が常々思っていることは、ロシア人は物事を実行する時に、どういう手順でどうやって目的を達成するかを考えたり、それを実施したりするのが苦手ですね。マネジメントが苦手で、一言で言うと詰めが甘い。しかし他方では、発想力がすばらしい。とにかくいろんなアイデアを彼らは捻り出します。中には実現不可能なものもありますが、実現できそうもないと考えて言わないよりは、とにかく何でも言った方がいいという文化がある。物事を考えるトレーニングがよくされていて、素晴らしい発想力をする人たちが多いと思います。

日本人はどちらかというとこの逆です。何か目標があると、その目標を達成するためにプロジェクトをマネジメントするのはうまくて、実現させていくのも得意ですが、しかし発想力そのものが素晴らしいかという、実はそれほどでもない。教育の中でいろいろと発想することをあまり学んでないということもあるのですが、豊かな発想力というものはあまり持っていません。

このロシア人の大胆な発想力と日本人の緻密なマネジメント力を結びつけるような、そういう交流の場が創出できれば、日ロ交流はもっと有意義になるのではないかと思います。

ということで、ロシアの発想力×日本のマネジメント力で、日露関係はさらに向上していくと私は確信しています。皆さんにも是非ロシアとの交流を広げていただいて、今後の発展に貢献していただければと思っています。

(写真等は、提供いただいた当日の配布資料から抜粋して掲載させていただきました)。

5月9日、東京・浜離宮朝日ホールにて「松井須磨子没後100年記念祭」(主催:ロシア文化フェスティバル日本組織委員会)が開催されました。記念祭では、「松井須磨子とロシア」と題して相沢直樹・山形大学教授が講演を行い、ピアニストの川西宏明さんが須磨子が劇中歌で歌った『カチューシャの唄』や『ゴンドラの唄』などを演奏、最後に、映画『女優』(主演:山田五十鈴、1947年制作)の上映が行われました。

明治から大正にかけて、坪内逍遙や二葉亭四迷らが外国文学の翻訳を通じて日本語の文章語と近代日本文学の確立に努力し、小山内薫らが近代演劇の開拓に邁進しました。中でもロシア文学とロシア演劇は日本の文化運動に大きな影響を及ぼしましたが、「日本初の女優」と言われる松井須磨子と彼女を擁して芸術座を旗揚げした島村抱月の活動は日本のロシア文化受容に大きな足跡を残しました。以下は、相沢直樹教授の講演録です。相沢先生とロシア文化フェスティバル組織委員会の了解を得て掲載させていただきます。

(当日の講演メモや配布された資料をもとに文章化しました。文責はすべて編集部にあります)



相沢 直樹 (山形大学教授)

松井須磨子とロシア

運命に翻弄されて

わが国で最初の女優と言われる松井須磨子は、明治19年(1886年)3月8日、長野県埴科郡清野村(現在の長野市松代町)の、旧松代藩士族の家に9人兄妹の末娘として生まれました。須磨子の前半生についてはよくわかっていないことが多く、生誕日についても諸説あります。本名は小林正子です。家庭の事情で幼くして養女に出され、間もなく養父が亡くなって実家にもどると今度はその実父も亡くした薄幸の少女は、姉の嫁ぎ先を頼って上京しました。東京の裁縫学校を卒業後、木更津の割烹旅館に嫁いだものの間もなく離縁させられ、心身ともに傷ついた正子は自殺未遂まで起こしました。彼女は夫から花柳病をうつされ子供を望めなくなってしまったようです。その後再婚した正子は「女優」を志すようになり、運命の糸にたぐりよせられるように、明治42年(1909年)に坪内逍遙と島村抱月の文芸協会付属演劇研究所の第1期生になりました。

文芸協会というのは、坪内逍遙と島村抱月が起こした総合的な文化啓蒙機関ですが、主に演劇に力が注がれていました。とりわけ、旧劇と言われた歌舞伎に対して、新しい演劇＝「新劇」運動を牽引する旗頭になったわけです。その演劇研究所の第1期生として彼女は入所したのです。

当時は「演劇改良論」というものがもっぱら議論されていたのですけれども、帝国劇場(帝劇/1911年開場)のような西洋をモデルにした近代的な劇場を建てること、観劇マナーを改善すること、そして旧劇＝歌舞伎を離れて新しい演劇を創出することが主な課題でした。その中でも大きな課題として出て来たのが「女優」を養成するということでした。というのも歌舞伎を見れば分かりますが、当時は男性の役者が女性の役を演じる「女形」が中心で、それでは新しい時代の演劇にふさわしくないと考え

られたのです。もともと、最初は「女優」ではなくて、「女役者」というふうに呼ばれていました。

「女優 松井須磨子」の誕生

明治43年(1910年)5月に正子は文芸協会の第1回試演会で、坪内逍遙訳・演出の『ハムレット』のオフィリア役に抜擢されて注目されました。ただ、稽古熱心なあまり結婚生活は破綻し、秋には離婚しております。翌明治44年(1911年)5月に帝国劇場で行われた文芸協会の最初の公演で、彼女は「松井須磨子」の名で一般観衆の前でオフィリアを演じて鮮烈なデビューを飾ったわけです。

同じく明治44年に本邦初演された『人形の家』(イブセン作、島村抱月訳・演出)で須磨子が演じた主人公ノラは、これまでわが国になかった「女優」による「新しい女」の体現と受け止められました。目覚めた主人公が夫と子供を捨てて家を出るという展開は、男性にも女性にも大きな衝撃を与えました。興味深いことに、『人形の家』が上演されたのとほぼ時を同じくして、新しい女性のあり方を模索していた平塚らいてうたちの雑誌『青鞥』が創刊されています。須磨子自身が編んだ『牡丹刷毛』という文集がありますが、その中に「マント着てわれ新しき女かな」という題字を添えた肖像が載っています。

須磨子が演じたノラにはリアリティがありました。当時の言葉では実在感と言っていますが、その実在感が「本当に女優が必要なのか」という議論に決着をつけたと言われています。とくに新劇を支持する人々は「待ちに待った女優がついに出了」、「新劇はもうどんな劇でもやれる」と喜びました。

須磨子は「舞台では捨身」になって、死に物狂いの「命がけの

芸」を見せたと言われています。自分の考えをはっきりと主張し、運命に抗い、社会の旧弊と闘う女の役が須磨子の十八番であり、また観衆が彼女に求めていたものでした。

新劇運動の旗手・島村抱月

須磨子は 32 年余りの生涯で 30 作以上の芝居に出演していますが、その活動は新劇運動の旗手・島村抱月と切っても切れない関係にあります。

島村抱月は明治 4 年(1871 年)、島根県那賀郡小国村(現在の浜田市金城町)に佐々山瀧太郎として生まれました。没落した家系で苦学していたところを、養子となることを条件に学資の提供を受け、上京します。そして早稲田大学の前身である東京専門学校文学科を首席で卒業後、海外留学生としてイギリス、ドイツに 3 年余り留学し、帰国後は明治・大正時代の文芸評論と新劇運動を牽引しました。ちなみに抱月がこの欧州留学から帰国したのはちょうど日露戦争が終結する時期で、ポーツマス条約に反対する群衆によって暴動(日比谷焼き打ち事件など)が起こったために、抱月が横浜港に到着した明治 38 年(1905 年)9 月の東京は戒厳令下にありました。

芸術座と「ロシア物」

「僕は、君、ラブをしたんだ...」。これは須磨子との仲が怪しくなってきたころ、抱月が中山晋平に漏らした言葉です。中年男のただの世迷言に聞こえるかもしれませんが、ここには初めて体験した感情、感覚をどう表現したらよいのか分からず、混乱を隠せない知識人の正直な姿があると思います。この「ラブ」とどう向き合うか、「ラブ」をどう表現するかということは、抱月個人の問題にとどまらず、わが国の文学にとって、演劇にとって、さらに表現芸術全体にとっての焦眉の課題でありました。

抱月と須磨子の抜き差しならぬ関係がスキャンダル化すると、抱月は芸文協会の幹事を辞任し、須磨子は諭旨退会を命じられます。大正 2 年(1913 年)、抱月は師逍遥と訣別し、教授職も家庭も投げうつ覚悟で、須磨子や早稲田の弟子筋らとともに「芸術座」を旗揚げします。

一時は危機に見舞われた芸術座を救ったのは、大正 3 年(1914 年)に帝国劇場で公演したトルストイ原作の『復活』でした。『復活』は芸術座で最も人気の演目として 5 年間で 444 回の上演を誇りました。芸術座はロシア作家たちの戯曲ないし小説に基づく芝居を積極的に上演しました。『復活』の他にはチェーホフの『熊』と『結婚申込』、ツルゲーネフの『その前夜』、トルストイの『闇の力』、『アンナ・カレニナ』、『生ける屍』があります。これは芸術座のレパートリーの 5 分の 1 弱、上演回数では実に 3 分の 1 強になります。

このように芸術座がロシア物を重用した背景には、島村抱月と弟子筋の趣味や意向が感じ取れます。「芸術座」という名前も社会主義に傾倒していた安成貞雄がモスクワ芸術座(Московский Художественный Театр)にならって提案し

たと言われています。なお、小山内薫はモスクワ芸術座を「美術座」と呼んでいました。

ただし、芸術座は抱月の弟子筋をはじめとした人脈に拠っていたため、幹部の多くは早稲田大学の英文系の出身でした。彼らはロシア語原作ではなく主に英訳によってロシア文学に親しみ、時にそれを日本語に重訳して世に知らしめました。



ロシア文化フェスティバル 2019 のカタログより

『復活』とカチューシャ

大正 3 年(1914 年)3 月帝国劇場で上演された『復活』は、トルストイの原作小説と、アンリ・バタイユが脚色したフランス版、抱月がロンドンで観た「レサレクション(Resurrection)」、この三つの『復活』をもとに、抱月が再脚色したものです。

トルストイの原作は、ネフリュードフが犯した罪の煩悶に焦点が当てられていますが、芸術座の『復活』はカチューシャとネフリュードフの恋に焦点が当てられ、カチューシャ中心の物語になっています。カチューシャを演じたのは、もちろん松井須磨子です。

当時この劇を見てしみじみとした感慨を抱いた人たち(特に女性)が少なくないことに驚かされますが、抱月が施したカチューシャ造形にその秘密の一端があるように思われます。

たとえば、須磨子のカチューシャは、終幕でネフリュードフに真意を打ち明けますが、このような場面は原作にはありません。

マスコワ(突然男の胸にすがり)「あゝ！私、このまゝぢや別れられません。このまゝぢや別れられません。どうして私の愛がこのまゝ消えて了ひませう？ 私はまだあなたを愛して

めます。愛していればこそあなたと結婚することをお断りしたのです。」

ここには当時の日本の観衆を驚かせ、感動させた、一見相反する二つの要素が表現されています。一つはカチューシャの素直な感情表現です。これは「新派」の女と異なり自分の感情を素直に表現し、自らの意思で行動する強さです。もう一つは、愛ゆえ身を引く女の姿です。河竹登志夫は、「カチューシャがノラと逆に身を引く女だったことが日本人の伝統的な心情に合った」という可能性を示唆しています。言ってみれば、新しいものと伝統的なものの「いいとこ取り」でしたが、このあたりのバランス感覚こそ芸術座の身上だったと言えるでしょう。

実際この場面などは、藤沼貴先生の言葉をお借りすると、「結ばれることによって愛を失ったネフリュードフとカチューシャが、別れることによって愛を全うした」というトルストイの原作がはらむ逆説を分かりやすく見事に表現する場面に仕上がっていると思います。

ウラジオストク公演

大正 4 年 (1915 年) 8 月、抱月と須磨子は専用の小劇場と住居を備えた「芸術倶楽部」を牛込区 (現・新宿区) の横寺町に完成させました。これは新劇史上画期的なことで、小山内薫らの築地小劇場ができる 9 年前のことです。しかし、この建設費の返済のため、8 月の末から年末にかけて国内外で大巡業を敢行しなければならなくなりました。まず、8 月末から北海道と東北地方を巡演して一月後に東京にもどるとすぐに、神戸港から台湾に向かい、さらに朝鮮、満州、ロシア (ウラジオストク) での公演を経て、12 月 25 日帰京という強行軍でした。実はこのウラジオストク行きは、最初から予定に入っていたわけではありませんでした。当初、須磨子たちは大連から帰国する予定でした (実際、団員の半分は大連から帰りました)。しかし、せっかくここまで来たのだからカチューシャにゆかりの深いロシアの地 (須磨子たちは何故かシベリアと呼んでいるのですが) を見ておきたいと予定を変更して、大連からハルビンを回って、ウラジオストクから帰ってきたわけです。

ハルビンで、抱月たちは「泥棒市場」、これは盗難品の安売り市場ですが、ここでロシアの軍服、帽子、外套、楽器、バラライカなどを買います。もちろんお土産ではなくロシア物の上演に使うためですね。

最後の巡業地、浦塩 (ウラジオストク) のプーシキン劇場での芸術座の公演は、西暦で 1915 年 12 月 21 日、現地ではまだロシア暦だったので 12 月 8 日です。須磨子によれば、プーシキン劇場では日本人から『復活』を上演してほしいという声があったのですが、「肝心の本場へ来て、もし下手をしますと大変」なので、彼女が『カチューシャの唄』を独唱するだけにして、芝居は中村吉蔵作の社会劇『剃刀』と喜劇『嘲笑』を上演しました。

現地では「もう雪が降り積もっていて、櫓に乗ったりもしましたが、時間の都合で見たいと思った露西亜の監獄や、警察の留置

場などは見られなかったのは残念です」という言葉からは、須磨子たちの研究熱心で好奇心旺盛なところが伺えます。現地の『極東』新聞にも、公演の翌々日に「日本の芝居」という観劇記事が出ました。

二元の道

島村抱月の芸術座の運営方針は「二元の道」として知られています。その要点は、一方では大劇場で一般大衆向けの商業劇を上演して一定の興行収入を得ることによって経営基盤を確保し、他方、小劇場で玄人向けの研究劇を上演し芸術性を追求するというものです。

ここでは同じくトルストイ原作によりながら、研究劇と商業劇の対照が鮮やかな『闇の力』と『生ける屍』を見てみましょう。

林久男訳の『闇の力』は大正 5 年 (1916 年) 7 月、牛込の芸術倶楽部で芸術座第 2 回研究劇として上演され、芸術的にも高い評価を受けました。須磨子はアニッサ役です。何しろ、日頃芸術座の活動に批判的であった小山内薫でさえ、「芸術座が今まで演った総ての芝居の内、第一の傑作」と賛辞を惜しなかったですし、森田草平にいたっては「新劇始まって以来、イヤ日本の芝居始まって以来、これほど面白い芝居はかつてなかった」と絶賛しています。

一方、島村抱月・川村花菱訳の『生ける屍』はトルストイの 6 幕 12 場の戯曲を 5 幕 6 場に改めたもので、大正 6 年 (1917 年) 10 月に明治座で初演されました。須磨子はマーシャを演じました。『生ける屍』は全部で 100 回の上演回数を誇り、『復活』や『サロメ』に次ぐ外国劇の当たり演目で、大劇場での商業劇の成功例ですが、小山内薫には「トルストイの『生ける屍』ぢやない」と完膚なきまでに弾劾されました。

『生ける屍』は妻の幸福を願って自殺を装い「生ける屍」となって放浪する男をめぐる悲劇で、秘密が露見し彼は皆の前で死を選びます。男は妻と恋人の間で揺れています。その揺れ方は原作と芸術座で異なっています。それを象徴的に表わしているのが終幕で男 (フェージャ) が息を引きとる場面です。トルストイ原作では、フェージャは駆け寄ってきた元の妻リーザに見守られて息を引きとることになっているのですけれども、芸術座の方では、フェージャはリーザたちの幸福を祈りながら、マーシャの腕の中で息絶えます。「あゝ、遂々フェージャは私のものになりました。私のものに成りました」とマーシャが泣き叫んで、フェージャの死骸の上に泣き伏すという幕切れとなっています。

小山内薫は、「総てが須磨子の役であるマアシアを中心として考へられている」点を鋭く批判し、抱月は反論しながら、今日でいうアダプテーション (翻案、脚色) の可能性を論じています。

3 大劇中歌

『復活』に挿入した『カチューシャの唄』の成功に気を良くしたのか、以後の芸術座の芝居にはほとんど必ず劇中歌が用意されるようになりました。作詞者は芸術座の関係者から職業詩人ま

でさまざまですが、作曲はほとんど全て中山晋平が手がけました。これは「七七・七五」などの小唄調の歌詞を「ヨナ抜き音階」(ドレミファソラシから日本人になじみのない半音が入っているファとシを抜いた「ドレミソラ」の五音階)で作曲したもので、覚えやすく歌いやすいメロディが作れるのです。「ヨナ抜き音階」は唱歌などに多用され、現在に至るまで歌謡曲はじめ様々な曲で使われています。

この劇中歌は松井須磨子が舞台上歌って芝居の目玉としたところ、劇場外でも口ずさまれ、流行歌として全国に広まりました。このうち、レコードの売上と人気、後世への影響などから、『カチューシャの唄』、『ゴンドラの唄』、『さすらいの唄』の 3 曲を「3 大劇中歌」と呼びたいと思います。それぞれ『復活』、『その前夜』、『生ける屍』の舞台上歌われました(もちろん原作にはこのような歌は無いのですけれども)。

芸術座の劇中歌のうち最も売れ、口ずさまれ、今日まで残っているベストスリーが、いずれもロシア文学由来の舞台から飛び出したということには、芸術座とロシア文学の、須磨子・抱月とロシアの奇しき因縁のようなものを感じずにはられません。

「カチューシャかわいや、わかれのつらさ」と歌い始める『カチューシャの唄』は、一番のみ抱月が作詞し、残りは相馬御風に書かせた歌ですが、中山晋平の作曲家デビュー作でもあります。レコードが驚くほど売れ、2 万枚とか 4 万枚とか言われていますが、存亡の危機にあった芸術座とオリエンツ・レコードを文字通り「復活」させたと言われます。

『ゴンドラの唄』がツルゲーネフ原作の『その前夜』の舞台から生まれたということは、わが国のロシア文学関係者の間でも実はあまり知られていません。吉井勇の作詞ですけれど、森鷗外訳の「即興詩人」(アンデルセン原作)に現れるベネツィアの俗謡を下敷きに作詞し、中山晋平は当時としては珍しい「舟唄(バルカローラ)」に由来する 8 分の 6 拍子を用いました。『ゴンドラの唄』はその後、黒沢明監督の映画『生きる』(1952 年)の中で主題歌級の扱いを受けたことによって、再び脚光を浴びることになりました。平成に入ってから、実は若い人たちのサブカルチャーの世界で「命短し恋せよ乙女」のこだまが聞かれます。なお、この夏公開予定の樹木希林さんの遺作映画の中でも『ゴンドラの唄』が歌われるようです。

『生ける屍』でマーシャが歌う『さすらいの唄』は、北原白秋の作詞です。これは「行か、戻るか、北極光(オーロラ)の下を、露西亜は北国、はてしらず」と、ロシアをはっきり名指して北方の果てしない大地での放浪と孤独を歌いあげている点が特徴で、以後の日本の歌謡曲・演歌に「北志向のさすらいぐせ」をつけたと言われます。

須磨子の死と芸術座の最期

大正 7 年(1918 年)はわが国でスペイン風邪と呼ばれたインフルエンザが猛威をふるった年です。その毒牙は須磨子と抱月の

運命をも変えてしまいました。10 月下旬、先にスペイン風邪にかかった須磨子が回復すると、今度は抱月が倒れました。悪いことに『緑の朝』の稽古でみな出払っていた中、容体が急変し、危篤の知らせを受けて芸術倶楽部にもどった須磨子は、抱月の死に目に会えませんでした。抱月が亡くなった直後に『緑の朝』の舞台上で須磨子が演じた狂女の姿には、鬼気迫るものがあったと言われています。

残された須磨子は当初悲しみを乗り越え、抱月の遺志を継いで一座を率いていこうとしているかに見えました。翌年の元日から公演ではカルメンに扮して気丈に舞台を務めていたのですが、結局、抱月の命日からちょうど 2 カ月後の大正 8 年(1919 年)1 月 5 日の朝、二人で建て、二人で過ごし、二人で夢を託した芸術倶楽部の片隅で、須磨子は自ら死を選びました。

須磨子は遺書で抱月の墓と一緒に埋葬されることを望んでいましたが、それはかなわず、現在彼女の墓は長野市松代町清野の小林家墓所と新宿区弁天町の多聞院にあります。

演劇を通して感情表現の新しい形を提示した抱月と須磨子

松井須磨子と島村抱月は、いずれもロシアの文化や習慣に直接触れたり、ロシア人と交流・交渉する機会に恵まれていた訳ではありませんが、芸術座のロシア物の芝居や劇中歌を通して、わが国におけるロシア文学の普及やロシア文化受容に大きく貢献しました。日本人にとっての「ロシア」の敷居を大いに低くしたと言えると思います。

当時は須磨子が演じるカチューシャの「接吻」(キス)が観客に衝撃を与えた時代です。接吻どころか、抱擁の場面すら問題視されたり、劇中歌が教育上よろしくないと言われ禁止されたりしましたが、そこではまさに道徳的価値観と裏表になった感情表現のあり方が問題になっていたということに注目すべきだと思います。

二葉亭四迷ら明治の先達はロシア文学の翻訳をとおして日本語による新しい文章語のあり方を模索したとよく言われますが、それなら島村抱月たちは演劇を通して日本語による日本人の感情表現の新しい形や可能性を提示しようとしたと言えるのではないのでしょうか。とりわけそれは、抱月自身も格闘した「ラブ」という、それまでのわが国が知らなかった、まったく新しい概念、新しい感情、感覚を表現しようとする試みでした。そしてそれは、ロシア文学のヒロインを数多く演じた「女優松井須磨子」という新しい器の登場によって、初めて現実的な形を持ったのです。

松井須磨子はやはり女優になるべくして生まれて来た人だったと思います。しかし、33 年に満たないその生涯のうち、彼女の舞台での命も、女優を志してから 10 年足らず、芸術座の旗揚げからたったの 6 年足らずのことでありました。「いのち短し、恋せよ少女(おとめ)」という言葉を変えてかみしめながら、松井須磨子とロシアをめぐるお話の結びとさせていただきます。